

第三 章 天 使 の 来 迎 ( 一三 )

自分じぶんはななお進すすんで二に段だん目めを奥おく深ふかく究きめ、また三さん段だん目めをも探たん険けんせむとした時とき、にわかてんに天てん上じやうから何なんともいいえぬ囀せう鳴めいたる音おん楽がくが聞きえてきた。

そこで空そらを仰あおいでみると、白びやく衣い盛せい装そうの天てん使しが数すう人にんの御お供ともを伴つれて、自じ分ぶんの方ほうにむかつて降こう臨りんされつつあるのを拜おがんだ。そうすると何なん十じゆ里りとも知しれぬ、はるか東とう南なんの方ほうに当あたつて、ほんのちい小さい富ふ士じの山さん頂ちやうが見みえてくるよような気きがした。

自じ分ぶんのその時ときの心こころ持もちは、富ふ士じ山さんが見みえたのであるから、富ふ士じ山さんの芙ふ蓉よう仙せん人にんが来きたものと思おもつた。しかししてその前まえに降おりてきた天てん使しを見みると、実じつに何なんとも言いえぬ威い嚴げんのある、かつ優やさしい白はく髪はつの、そして白しろ髭ひげを胸むな前まへまで垂たれた神しん人にんであつた。

神しん人にんは自じ分ぶんに向むかつて、

『産うぶ土つち神かみからの御お迎むかえであるから、一い時じ帰かえるがよい』

との仰あおせであつた。しかし自じ分ぶんは折せり角かくここままで来きたのだから、今いま一いち度ど詳じゆしく調しらべてみたいと御お願ねがひしてみた。

けれども御お許ゆるしがなく、

『都みやこ合あひによつて天てん界がいの修しゆ業ぎやうが急いそぐから、一ひとままず帰かえれ』

と言われる其の言葉が未だ終らぬうちに、紫の雲にわが全身が包まれて、ほとんど三四十分と思わるる間、ふわりふわりと上に昇ってゆくような気がした。しかしてにわかには膝が痛みだし、ブルブルと身体が寒さに慄えているのを覚えた。

その時には、まだ精神が朦朧としていたから、よくは判らなかつたが、まもなく自分は高熊山の巖窟の前に端坐していることに、明瞭と気が付いた。

それから約一時間ばかり正気になっておると、今度はだんだん睡気を催しきたり、ふたたび霊界の人となつてしまつた。そうすると其処へ、小幡神社の大神として現われた神様があつた。

それは自分の産土の神様であつて、

『今日は実に霊界も切迫し、また現界も切迫して来ておるから、一まず地底の幽冥界を探究する必要はあるけれども、それよりも神界の探険を先にせねばならぬ。またそれについて、霊肉ともに修業を積み重ねばならぬから、神界修業の方に向え』  
と仰せられた。そこで自分は、

『承知しました』

と答えて、命のまにまに随つことにした。

そうすると今度は自分の身体を誰とも知らず、非常な大きな手であたかも鷹が雀を引摺んだように、捉まえたものがあつた。

幽冥界……地獄のことですが、第七〇巻一章「信人権」には「幽冥通信」として「地獄界は僧侶や牧師ばかりで満員だ。普通人間では殺人、放火ぐらいなもので、あまり罪が軽すぎて滅多に地獄に入れてはくれない。しかし坊主や牧師ならその名称だけでも幾人でも割り込むことが出来る」とあり、一読してみませんか。

やがて降された所を見ると、ちようど三保の松原かと思わるるような、綺麗な海辺に出た。ところが先に二段目見た富士山が、もつと近くに大きく見えだしたので、今それをも思つと三穂神社だと思われる所に、ただ一人行ったのである。すると其処に二人の夫婦の神様が現われて、天然笛と鎮魂の玉とを授けて下さったので、それを有難く頂戴して懐に入れたと思つ一刹那、にわかには場面が変わつてしまい、不思議にも自分の郷里にある産土神社の前に、身体は端坐していたのである。

ふと気がついて見ると、自分の家はついそこであるから、一遍帰宅つて見たいような気がしたとたんに、にわかには足が痛くなり、寒くなりして空腹を感じ、親兄弟姉妹の事から家政上の事まで憶い出されてきた。そうすると天使が、

『御身が今人間に復つては、神の経綸ができぬから神にかけられ』

と言いながら、白布を全身に覆いかぶされた。不思議にも心に浮んだ種々の事は打忘れ、いよいよこれから神界へ旅立つということになった。しかして其の時持つておるものとしては、ただ天然笛と鎮魂の玉との二つのみで、しかも何時のまにか自分は羽織袴の黒装束になつていた。その処へ今一人の天使が、産土神の横に現われて、教えたまつよう、

『今や神界、幽界ともに非常な混乱状態に陥つておるから、このまま放つておけば、世界は丸潰れになる』

と仰せられ、しかして、

三保の松原……静岡県清水市の南東部から駿河湾へ突出した砂嘴(さす)。古来、富士を望む景勝地として聞こえ、羽衣の松・御穂神社があります。

御穂神社……静岡県三保に鎮座(清水駅から八キロ)。御祭神は三穂津彦(大己貴命)・三穂津姫命。

二人の夫婦の神様……現界では靈学中興の偉人本田親徳の弟子で、聖師さまに帰宿される神霊をサニワして神使小松林命であることを証明した長沢雄植氏と、その母堂で本田親徳から依頼されて聖師さまに鎮魂の玉・天然笛・神伝秘書の巻物を渡した長沢豊子さんのこと。

産土神社……各地域を常に守護される、たとえば市長・町長・村長に相当する神霊を祀る神社。ここでは穴太の小幡神社のこと。

『御身はこれから、この神の命ずるがままに神界に旅立ちして高天原に上るべし』  
と厳命された。

しかしながら自分は、高天原に上るには何方を向いて行けばよいか判らぬから、

『何を目標として行けばよいか、また神様が伴って行つて下さるのか』

とたずねてみると、

『天の八衢までは送つてやるが、それから後は、そうはゆかぬから天の八衢で待つておれ。

そうすると神界の方すなわち高天原の方に行くには、鮮花色の神人が立つておるからよ

くわかる。また黒い黒い何ともしれぬ嫌な顔のものが立つておる方は地獄で、黄胆病みの

ように黄色い顔したものが立つておる方は餓鬼道で、また真蒼な顔のものが立つておる方

は畜生道で、肝癆筋を立てて鬼のように怖ろしい顔のものが立つておる方は修羅道で

あつて、争いばかりの世界へゆくのだ』

と懇切に教示され、また、

『汝が先に行つて探険したのは地獄の入口で、一番易い所であつたのだ。それでは今度は

鮮花色の顔した神人の立つておる方へ行け。そうすればそれが神界へゆく道である』

と教えられた。しかしして又、

『神界といえども苦しみはあり、地獄といえどもそれ相当の楽しみはあるから、神界だか

らといつてそう良い事ばかりあるとは思つな。しかし高天原の方へ行く時の苦しみは苦し

と。  
天の八衢……仏教者のいう六道の辻のこ

んだだけの効果があるが、反対の地獄の方へ行くのは、昔から其の身魂に罪業があるのであるから、単に罪業を償うのみで、苦勞しても何の善果も来さない。もつとも、地獄でも苦勞をすれば、罪業を償うというだけの効果はある。またこの現界と靈界とは相関聯しておつて、いわゆる靈体不二であるから、現界の事は靈界にうつり、靈界の事はまた現界にうつり、幽界の方も現界の肉体にうつつてくる。ここになお注意すべきは、神界にいたる道において神界を占領せむとする悪魔があることである。それで汝が今、神界を探険せむとすれば必ず悪魔が出てきて汝を妨げ、悪魔自身神界を探険占領せむとしておるから、それをそうさせぬように、汝を神界へ遣わされるのだ。また神界へいたる道路にも、広い道路もあればまた狭い道路もあつて、決して広い道路ばかりでなく、あたかも瓢箪をいくつも豎に列べたような格好をしているから、細い狭い道路を通つているときには、たつた一人しか通れないから、悪魔といえども後から追越すというわけには行かぬが、広い所へ出ると、四方八方から悪魔が襲つて来るので、かえつて苦しめられることが多い』と教えられた。間もなく、神様の天使は姿を隠させたまい、自分はただ一人天然笛と鎮魂の玉を持ち、天蒼く水青く、山また青き道路を羽織袴の装束で、神界へと旅立ちすることとなつた。

(大正二〇・一〇・一八 旧九・一八 外山豊二録)

罪業……悪い結果を生む行い。身・口・意の三業で作る罪。

瑞月

現<sup>うつ</sup>し世に生るも神の御心ぞ

まかるも神の恵みとぞしれ

よきことをなしてこの世を去る人の

靈魂の幸ぞ羨ましけれ